

【共同研究】

開発的グループにみる対人理解度の発展¹⁾

— I. 中途参加者の同化を中心に —

臺 利夫・丹治哲雄・大熊恵子

The Growth of Acquaintance through
the Developmental Group Approach

— I. The Assimilation of New Group Members —

Toshio Utena, Tetsuo Tajimi and Keiko Ôkuma

It has been said in the developmental group, that newcomers or newly added members relate to group activity in the context of their personal learning process and assimilate into advanced systems more quickly than old timers who have long belonged to the group. The effects of the learning process on the assimilation of new group members was investigated by the "revised acquaintance test (a variant of sociometric test)". From the time of pre-session questionnaire to the time of post-session questionnaire, the grade of acquaintance (width and depth of understanding others) increased more progressively in new members than in old timers. Generally, the degree of group cohesion develops in the sense that members feel that they have participated in group activity with each other. Joining together may feed the self-image of each member. It was confirmed by TST (Twenty Statements Test) that the change of self-image of members in a developmental group were greater than in a seminar group.

集団心理療法やグループカウンセリングをグループダイナミックスの視点で捉えることは、この道の先駆者であるSlavson (1957)の否定にもかかわらず、その後の多くの研究者によって肯定されている (Ohlsen, 1970;

Foulkes, 1975; Agazarian & Peters, 1981). 本研究では、グループアプローチの実践で得られた体験素材を、グループダイナミックスによる解釈に止まらず社会心理学的な査定に基づいて検討し、その発展過程を明らかにし

1) 本研究の一部は1993年度文教大学大学院共同研究費による。また本論文の要旨は日本心理学会第53回大会で発表した。

ようとした。

継続的に実施している集団心理療法においては、新参加者（中途参加者）がコミュニケーションの度合いを増し、参入度を高めて古参加者（継続参加者）に急速に同化することが臨床心理学の分野（Garland, 1992）で見出されている。他方、社会心理学の分野では実験的小集団の模擬新参加者の類似の同化過程が社会的範疇化social categorizationの問題と絡めて検証されている（Moreland, 1985）。本研究では開発的グループの中途参加者・継続参加者の全成員に対し、実施期間の前後に準ソシオメトリックテストである対人理解度尺度による査定を行い、個々の成員の成員間関係の拡大・深化とともに全体のグループの構造的変化を追った。

しかし、参加者が大学生の場合にありがちだが、本来は未知のはずのグループを構成し、開始する場合には、既知の間柄の成員（既にある程度の相互理解がある）が何人かいるが、それ以外の未知の成員において顕著な理解度の発展があり、それとともに集団の凝集度も高まるのが見出せる。この点は集団心理療法への中途参加者が継続参加者よりも急速にコミュニケーションを増大して活動に加わることに相通じるであろう。

本研究の目的の1は、このようにグループ開始位相、継続位相の双方に関わる対人理解度に関する集団内一部メンバーの加速的発展を、査定によって明らかにする試みである。

また目的の2は、外的に捉えられる集団の発展と個人のパーソナリティの内的発展が相即するだろうという仮定の下に、参加成員の自己観の変化をゼミ形式の教育集団との比較に基づいて検討することである。

開発的グループの進め方

開発的グループのメンバーは文教大学学生・大学院生である。最初のメンバーは1991年9月に掲示により募集された。その名目は「ディスカッショングループのリーダー養成

を目指し、自由な話し合いとロールプレイングにより、自己と他人に対するより深い理解と互いのコミュニケーションの発展を体験する」というものであった。

グループのセッションは毎週1回、毎回約1時間30分で、一つの期のセッション数は11回～12回（3ヵ月～4ヵ月、1年間で2期）であった。

開発的グループの進め方は、あるメンバーからの自発的発言—その場の自由な課題提示に基づいて話し合い free floating discussionに移る。初期段階では指導者は主な課題を提示したメンバーとやりとりしながら課題を焦点化し、それを他のメンバーに連鎖的に回したり、グループ全体に投げ返すやり方をとって、各メンバーの固有な考え・感情・体験の表出を促す。個々のやりとりは受容、感情の明確化、話された事柄の実状についての質問などの他、指導者自身の考えを示唆して討論の素材にすることもある。問題をさらに具体化することが適当とみなした場合には劇的・仮定的に当該状況を設定してロールプレイングを導入した。

対 象 者

開始時の第1期グループ（Aと略記）では、メンバーの学生10名全部がこの種のグループ体験は無かったが、互いに既知の者と未知の者が含まれていた。つぎの対象としてとった第4期（1993年春）のグループ（Bと略記）8名と第6期（1994年春）のグループ（Cと略記）12名は、それ以前の期からの継続参加者の他に当期からの新参加者を含んでいた。つまり後者は中途参加者である。なおグループBより学部学生とともに大学院生が加わっている。統制群としては3群のゼミグループ（S1, S2, S3と略記）をとった。それぞれ7名、11名、16名のメンバーから成る。A, B, CとS1の指導の担当は同一の教員である。ゼミは学部3年生を対象とした通念の心理学ゼミ（1回1時間半）だが、その内容としては自由研究とレポート提出を共通して義務づけ

る以外、研究テーマ・受講生数・担当教員は異なっている。

目的1について

方法：下記の表1のような対人理解度尺度(試案)により、開発的グループではある期の開始時(第1回目)と終了時(第2回目)に、またゼミ・グループでは前期の授業開始時と前期の授業終了時(その間、10回から13回の授業を実施)に、受講生全員に調査を行った。個人別理解度得点(以下、得点と略記)の計算は、あるメンバーがグループ内の他のメンバー全員について評価した対人理解度を合計し、それをメンバー数で割ったものである。それにより、異種のグループの各メンバーの第1回目の得点が第2回目になどのように変化したかを調べ、比較した。

結果と考察

1. 全体的傾向

表2、図1に開発的グループとゼミの各メンバーの対人理解度得点の平均増加量を示

表1 対人理解度尺度

このグループの中にいる人について、下記の基準によって全員を(名前で)分けてください。

1. まったく知らなかった
2. 顔は見たことがあるがそれ以外知らない
3. その人のことをいくらか知っている
4. その人の性格をいくらか知っている
5. その人の考え方や感じ方がいくらかわかる

す。全体で比較してみると、期の終了時には開発的グループはゼミ・グループのメンバーよりも有意な対人理解度の増加を示した($t=3.879$, $df=51.11$, $p=0.003$: Welch検定)。

全体的にみると程度の違いはあっても、どのグループのメンバーも第2回目には得点の増加が見られる。また、第1回目の得点と変化量の間的相关はおおむね負の相関を示す傾向が認められたが、全メンバーがグループ経験のないAの得点増加傾向、とくに第1回目に低得点の者の得点増加は顕著であった。

なお開発的グループでは開始後2~3セッションで若干の脱落者がいた。

2. 中途参加者を含むグループの特徴

B, CはAと異なり、グループ経験のない中途参加者(図1の中の白丸)それぞれ3名、7名と残りの継続参加者(黒丸)で開始した混成グループである。このグループの第1回目得点と変化量の間には、Aと同様に比較的高い負の相関($r=-0.7533$)が見られ、とくに第1回目査定で低得点者が得点を増加している傾向を示した。つまり、このグループの第1回目査定における得点は、当然のことながら、中途参加者3名では継続参加者5名よりも低い。しかし前者の得点増加量は後者のそれを上回る傾向があった。こうした傾向は、Cでも顕著に認められた。Cのグループ第1回目得点と変化量の間にも高い負の相関($r=-0.9490$)がみられた。ここに見る限り、互いに既知のメンバーと未知のメンバーとでスタートする開発的グループでは、一般

表2 開発的グループとゼミ・グループの対人理解度得点の平均増加量

開発的 グループ	人数	平均 増加量	標準 偏差	ゼミ・ グループ	人数	平均 増加量	標準 偏差
A	10	1.76	0.66	S1	7	0.76	0.30
B	8	1.11	0.40	S2	11	0.78	0.45
C	12	1.73	0.66	S3	16	1.21	0.44
全 体	30	1.57	0.67	全 体	34	0.99	0.47

に、未知のメンバーにおいて対人理解度の発展が顕著な傾向をもつということが出来るだろう。

3. 開発的グループとゼミ・グループの比較

開発的グループに見られるような顕著な得点増加傾向はゼミ・グループを全体として捉えたと認められなかった。第1回目得点と変化量の間の相関について、3つの開発的グループではゼミ・グループのいずれよりも一層高い有意な負の相関を示した。

また、Aの指導教員とゼミS1の教員は同一人物であるにもかかわらず、AとS1の間に顕著な差異が認められている。このことはAでの対人理解度の顕著な変化は指導教員個人の影響を大きく受けてはいないことを示唆している。またゼミの3グループのメンバー数に差があることを顧みると、グループの性格はそのメンバー数によって左右されないことを示している。

以上要するに、こうした低得点者の加速的な得点増加は、教育的集団であるゼミとは異なる開発的グループの一般的傾向を表すものだろう。

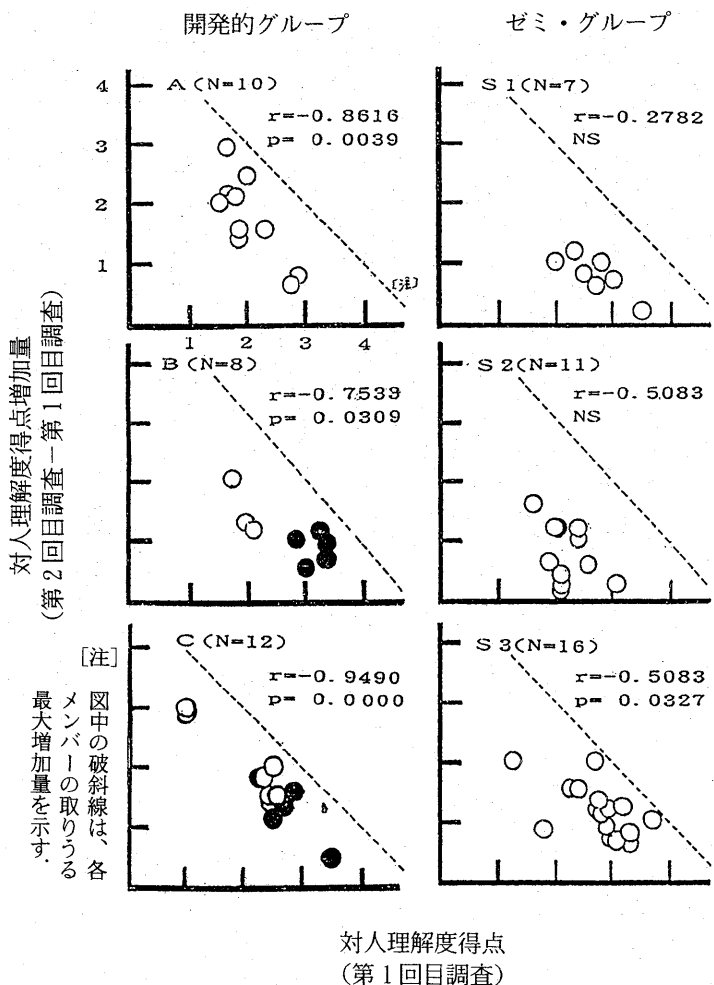
目的2について

方法：開発的グループとゼミ・グループという集団の特性とそれぞれのグループの参加メンバーの(TS T [20等法]によって捉えた)自己観の変化の関連を検討した。これはグループの発展と個人の内面の発展は相応じるという仮定に基づいている。

TS Tは Kuhn, M. H. によってつくられた一種の筆記式の投影法であるが、1950年代から多くの研究者によって発展させられてきた(星野1961, 上野1981)。このテストでは「私は…」で始まる文章を10分間のうちでできるだけ20書くことが求められ、被験者の自己についてさまざまな視点での理解が可能になる。

TS Tの分析について、当研究の当初は星

図1 各グループの第1回目対人理解度得点と得点増加量の関係



野による形式にしたがって、個々のメンバーの文章をSC（社会的項目）・OBC（外的事象への関心・欲求・願望）・SEV（自己評価）に評定し、各項目の第1回目と第2回目の数量の増減から変化を捉えて分類することを試みた。またこの結果が、第1回目に低得点の者と高得点の者ではどのような差があるか検討しようとした。しかしいずれの場合も変化傾向を数量的に捉えることはできなかった。

そこで各メンバーについて第1回目と第2回目のTSTの記述をSEVやOBCの内容にあわせてその文脈を把握して全体として二つの時点の意味を比較し、変化の型を2人の評定者が別個に評定した。そして評定結果をつき合わせ、不一致のものについては合議して変化の型を分類した。

結 果

1. 各人のTSTの第1回目査定から第2回目査定への判定は7つの型に分類された。（なお、この類型的カテゴリーは暫定的で、今後の実践と査定によって改正される可能性がある）各型とその具体例は以下の通りである。

I型 外的対象、事象や他者についての好き嫌い（主にOBC）から自己へのまなざし（自己評価・自己反省）への変化

[例] 第1回目の「私は頭がよくなりたい。痩せたい。弟が欲しい。寿司が好き」などから第2回目での「私は小さい。足りないものが多い。白と黒が混ざりつつある。母親に性格は似ているみたい。他者を気にする」といった自己へのまなざしが見られる内容への変化。

II型 自己否定的な（自己蔑視的、ヤケになっているなどの）表現から、i 脱却の意思 ii 目標探索、目的意識 iii 自己肯定的 iv 自己の両面性・二重性・矛盾への気づき v 自己観の多面化

[例] 第1回目で「私は可愛くない。独占欲が強い。泣き虫。お調子者。みえっぱりでわ

がまま」といった自己否定的な表現から、第2回目は「私は考えていることを抑えてしまいやすい。自分の意見を通そうとする割に他人の意見に左右される。自分のすべきことがわからなくなることがある」など、自己矛盾への気づきと混迷がうかがわれる内容に変化する。

III型 自己反省の量的増加

[例] 「私はおっとりしている。明るい。真面目。優しい。自分に甘い」といった自己反省が2回目で量的に増加したもので、質的な変化は少ない。

IV型 単なる i 自己内省や ii 対象の好き嫌いから自他関係の留意や愛他的意思への変化

[例] 第1回目の「私は心理学に興味がある。スポーツが好き。動物が好き。よく音楽を聞く。よく海に行く。おっちょこちょい。おしゃべり」といった単なる対象の好き嫌いや自己反省から、第2回目の「私は周囲に対しおせっかい。多少とも他人のことを考えてあげられる。人の親切をととも嬉しく思う」といった自他関係への留意や愛他的意思への変化。

V型 i 自己反省欠如 ii 自己逃避から否定的であれ情緒不安定の増大であれ、いくらかの自己反省へ

[例] 「私は学生。22歳。影。自然の一部。生物。無限大。誰かはっきりしない。」といった事実記述的、防衛的、自我の曖昧な表現から、第2回目は「私は自発性が乏しい。比較的幸せ者。他人にどう思われているのだろうか」と自己反省への変化が見られる。

VI型 主に対象の好き嫌いのレベルから自己肯定的な構えへの変化

[例] 第1回目の「私は自然が好き。歌が好き。」といった対象への好き嫌いの羅列から、第2回目は「私は最近多忙です。多忙でも大学生していると感じています。精神的に落ち着いています。仲間にも恵まれています。可能性を信じます」と自己肯定的な構えへの変化。

Ⅶ型 i それぞれ内容は異なっても第1回目と第2回目の間で変化なし ii 第2回目でも自己反省や自我関与的表現の減少。

2. グループ別の変化の型は表3のとおりである。

A, B, CとS1, S2, S3では顕著な差が見られる。前者の変化はⅠ型～Ⅵ型のいろいろなカテゴリーにわたっているのに対して、後者ではⅡ, Ⅲ型に偏っている。つまり開発的グループでは多様な形の自我関与を生んでいるのに対して、ゼミ・グループではそうした傾向は認められない。とくにA, B, CとS2, S3を比べると、前者のメンバーではいずれの型にせよ変化が認められてⅦ型が少ないが、後者ではⅦ型への集中が認められた。すなわち、ゼミ・グループでは基本的に変化がないか、むしろ自我内省の減退を来しており、外的課題を得てそうした結果を生じた場合もあると考えられる。

ただし、S1についてはⅦ型が少なく、各型への分布の仕方は開発的グループに似かよっている。これについてはA, B, CとS1が同一指導者であることから、いくらかの指導者の影響力が示唆されるだろう。

表3 グループ別のTSTの変化の型の分類

	開発的グループ				ゼミ・グループ			
	A	B	C	計	S1	S2	S3	計
Ⅰ	2	0	1	3	1	0	0	1
Ⅱ	3	1	0	4	3	2	0	5
Ⅲ	0	2	4	6	1	1	5	7
Ⅳ	2	0	2	4	0	0	0	0
Ⅴ	1	2	1	4	1	0	0	1
Ⅵ	0	2	1	3	0	0	0	0
Ⅶ 増加	1	1	2		1	4	10	
減少	1	0	1	6	0	4	1	20
計	10	8	12	30	7	11	16	34

A : 1991.9~1992.1 (第1期)

B : 1993.4~1993.7 (第4期)

C : 1994.4~1994.7 (第6期)

S : 1994.4~1994.7

3. ケーススタディ

TSTの変化が明瞭に見られた2事例を取りあげ、TSTの内容とグループ活動中の言動について検討した。

[事例1] X : 女性 学部1年次にグループA(第1期)に参加、以後3年次のグループB(第4期)まで継続参加

学部1年生の新規参加当初は、自発的発言は、まったくなかったし動きも鈍かった。しかし第4期の第1セッションでは他のメンバーが親子関係を再現したロールプレイングに、「温かく、好い親子関係だなあと見ました」と感想を自分から述べて一堂がシンミリする。第11セッションでは、「些細なことでふくれて、周囲を不快にする友人にどうアプローチするか」のテーマでロールプレイングしたところ、その友人の役割を真に迫って演じた。TSTは、第1期ではⅠ型(対象の好き嫌いのレベルから自己反省)であったが、第4期ではⅥ型(主に対象の好き嫌いのレベルから自己肯定的な構え)となる。

[事例2] Y : 女性 大学院1年次にグループB(第4期)から参加。2年次のグループC(第6期)を経て大学院終了まで継続。

参加当初は自発的発言は見られなかったが、指名されれば、質問された事柄には応答する。またロールプレイングでも指名されればきちんと役割を演じることができる。第3セッションではその場で生じたテーマの場面の主役をかなり思い切って演じる。その中でYが友達とのチームワークを大切に思う態度の一端が表現されていた。

第4期の後半では、セッションのはじまりから積極的に発言することが増える。「長年の友人が、シスターへの道を選び、その経過でなんの相談もなく、結果だけを知らされたことがショックだった」、「自分の実家では門限もうるさく、家を出て自立したい」といったYの発言をきっかけに、それをテーマにしたグループディスカッションも2度もたれている。またその発言に対して他のメンバーから質疑応答が繰り返され、自然にYの発言

が増えていった。

グループCでは自らの生活場面での課題をロールプレイで演じたり、ディレクターの役割をとるなど、グループへの積極的な参加の姿勢が見られた。TSTはⅢ型（自己反省の量的増加）と分類された。

総 括

開発的グループでは、新人あるいは中途参加者は彼等の固有の学習過程にしたがって集団活動に関わってグループのダイナミクスを学び、他のメンバーを理解して、全員が新人だった出発段階での初期のメンバーによるグループへの同化よりも、一層高度のグループ・システムに一層速やかに同化するといわれてきた。新人の同化に関する学習過程の効果が“対人理解度テスト”によって調査された。セッション前調査時からセッション後調査時へと、対人理解度（他者理解の広がりや深まり）は新人においては継続参加者（当期以前の参加メンバー）におけるよりも一層前進的に増大した。

メンバーが相互理解度と同化を重要な側面とする集団凝集性はメンバーが互いに集団活動に参加していると感ずる点においてますます発展する。この感じはやがて自己にフィードバックし、メンバーの自己像を変えるようになる。TSTで確かめられたのは、かような集団凝集性の増大が開発的グループのメンバーの自己像が他のセミナー・グループのメンバーの自己像より一層大きく変化したことに応じていたということであった。

今後の課題

開発的グループの対人理解度の発展とメンバーの自己観の変化の双方について今後検討すべき課題が残されている。

1) 対人理解度に関していうと、中途参加者は当該グループ（ある期）の開始時には対人理解度・被理解度得点はともに低いが、その期の終了時の被理解度でも理解度にみるように一様な増加を示すかどうかを検討されねば

ならない。理解度・被理解度には集団のさまざまな要因がはたらいているが、開始後2～3セッションで脱落者が出ている点も顧みながらこの点を究明することが必要である。そしてさらにセッションを続けた場合に被理解度と理解度の関連がどのようになるかも調べることになる。

2) 自己観の査定として実施したTSTの結果に関していうと、開発的グループのメンバーにおけるなんらかの自我関与的叙述の増大は、これらのメンバーがある期の終了時に対人理解度を増し、コミュニケーションを拡大・深化して集団活動に自発的に参入してきたことと関係があるだろう。しかしさらにセッションを重ねるなら被理解度も高まって、一層明瞭にTSTの変化が表れるだろう。

この点は私的自己と公的自己の関連という視点からも捉えられる。私的自己は自分の自分への理解であるが公的自己は自分の集団への準拠や同一視に関わる。双方の自己の相互作用が、ある状況では私的自己を優越させ、他の状況では公的自己をあらわにして最終的には統合化されるのではない。

なお、上記の自我関与叙述の増大はグループ全体をみた場合の開発的グループとゼミ形式グループの間の差異であった。今後はさらにグループ数を増して、とくに開発的グループの中途参加者においてこの傾向が顕著に見られるかどうかを検討せねばならない。

参 考 文 献

Agazarian, Y. & Peters, R. (1981) *The visible and invisible group*. Routledge & Kegan Paul.

Foulkes, E. (1975) *Group-analytic psychotherapy*. Interface Book.

Garland, J. A. (1992) *The establishment of individual and collective competency in childrens group as a prelude to entry into intimacy, disclosure, and bonding*. *Int. J. of GPT.*, 42(3), 395-405.

星野命 (1961) 20等法による自己態度の研究手引き 国際基督教大学教育心理研究室

開発的グループにみる対人理解度の発展

Moreland, R. L. (1985) Social categorization and the assimilation of "new" group members. *J. of Pers. & Soc. Psychol.*, 48(5), 1173-1190.

Ohlsen, M. M. (1970) *Group counseling*. Rinehart & Winston. [M.オールセン 中野良頭

訳 グループ・カウセリング 誠信書房 1972]

Slovson, S. R. (1957) Are there "group dynamics" in therapy group? *Int. J. of GPT.*, 7(2), 101-154.

上野轟 (1981) 相手の身になって考える 有斐閣選書